

●松下竜一の生き方を理に走らず、情に流されず、静かに優しく辿った評伝。

新木安利著『松下竜一の青春』海鳥社刊

鈴木耕（編集者）

断言するけれど、この『松下竜一の青春』は評伝文学の傑作である。このような力と才能を持った著者が、地方に隠れているなんて驚くしかない。私が松下竜一の古くからのファンである、というバイアスがかかっていると、これほど著者と対象人物が渾然一体となつて、優しくも切ない文章に昇華されている評伝は、他に類を見ない。

松下竜一は大分県中津市に生まれその知で生涯を終えた作家である。『豆腐屋の四季』でデビューし、その後、『風成の女たち』『五分の虫、一寸の魂』『砦に抛る』『ルイズ―父に貰いし名は』『狼煙を見よ』などの名著を世に問い、同時に反原発、反開発、冤罪救援、憲法擁護など幅広い市民運動を展開した、堂々たる反骨の人であった。

著者の新木安利氏は、松下が立ち上げた『草の根通信』の手助けなどで松下の警咳に接し、その人柄に魅せられ、松下の死（2004年、67歳）まで彼の伴走をすることとなる。

新木氏は、松下のすべての著作を、どんな小さなものをも見逃すことなく、それも同じものを繰り返し繰り返し読み込んでいく。その上で松下の思想の根源に迫る。白眉は

「暗闇の思想」と「濫訴の弊」である。「ランソのヘイ」とは何か。民がみだりに訴えあつては社会秩序が乱れるし、庶民が法律になじんでは支配がうまくいなくなる。ゆえに、みだりに訴えを起こしてはならぬ」という権力側の言葉である。松下はこれを逆手に取る「ランソの兵」と読み替え、権力も大企業も訴えて訴えぬくことによつて、新しい庶民の世が到来すると看破した。こんな松下の生き方を、理に走らず情に流されず、著者は淡々と静かに、しかも優しく辿っていく。

この本の特長は、著者の文章が見事に美しいことである。対象に寄り添いすぎれば文章は甘くなり、筆は曲がる。地方の文筆家にありがちな郷里を吹聴したいがための誇張や歪曲もない。著者は一人の同郷人のまことに希有な生き方を、とても静かな筆致で甦らせた。

私は自分の本棚を漁つて、もう一度松下の著作を読み返してみようと思つた

「通販生活」№237「地方出版はお宝の山」より部分、二〇〇九年一月一五日刊、カタログハウス刊）。